

現地での教育活動とその課題

石川八重子（市原市立若葉中学校）

派遣国 ニジェール共和国 職種 小学校教諭

派遣前

・ 出発前に何を準備しておくべきか。

準備していった方がいいもの

- 生活について
- ・ 日本食少し（赴任当初に必要。体調を崩した際に重宝する。）
 - ・ 日本の調味料（味噌・醤油）
 - ・ 文房具（自分で使うためのもの。現地の物は質が悪いのでいらいらする）
 - ・ 国語辞典（報告書を書く時必要です。また、日本に帰ってからのことを考えて正しい日本語を...）
 - ・ 水筒（赴任当初は水に注意。暑い国は特に）
 - ・ 自分の趣味の物（学校は休日が多いので、自分の時間にいろいろできそうです）

活動のために

- ・ 語学の助けとなるもの（辞書・参考書等）
- ・ 教育関係の本（できれば現地公用語のもの入手できるとよい）

活動上で何かを伝えたいとき、資料があるとないとでは伝わり方が格段に違う。日本のものを翻訳するにしても、自分で一から考えるのは大変である。やはり根拠となる日本の教育書が必要。できれば訓練中に翻訳しておくのが良い。（語学の先生と仲良くなるう！）

現地の状況は日本での予想を超えるはず。日本で用意していったものが役に立つとは限らない。送ってもらえるようにしておくが良い。（私は何度も「本棚のあの位置にあるあの本...」と思った）

必要なものを届けてもらえるように、自分の部屋や書棚、コンピュータの情報を整理しておく。

これはその通り。しかし、研修終了後は荷造りや買い出しで忙しいので、コンピュータの情報整理くらいは駒ヶ根に在る間にしておくといい。

家にあるものを送ってもらえそうな人は、自分の部屋の物については（本棚など）、出発前にデジカメで写真を撮っておくと役に立つように思う。（記憶ほど頼りにならないものはない...）

物的な準備だけでなく、環境的な準備も必要である。

日本の学校でのマッチアップ体制づくり（リソースとして日本での勤務先が重要になる）

4月に現場を離れてしまっている（しかも校務分掌はすでに決定し、学校は動い

ているので、たとえ国際理解担当の先生がいたとしても、その方にこれから依頼して大きなことを始めよう、というのは無理。年度初めにきっちり依頼できていれば可能性はあると思う。

送料の問題があるので、自分宛の封筒（住所を記入して）と切手を用意して置くと、何か送ってもらうときに依頼しやすいし、学校側から情報を送ってくれることもあるかもしれない。

自分がいつ帰ってくるのかをきちんと伝えておくべき。できれば書面で残していく。（誰もがわかるように）特に現職の人は帰国後の人事の問題があるので、任国での連絡先、日本での連絡先を事務・校長・教頭に渡すこと。（念には念を。異動があるのでこれくらいしておいた方がよい）

派遣中

・1年9ヶ月をどうするのか、どういうリズム、ペースで過ごすのか

現地に慣れるにはやはり1年かかる（これはそれほど短縮できないと思う。無理をすると体に変調を来す。少しずつ慣れていこう）。そうすると残り8ヶ月。本当にあつという間である。学校は長期休暇があるので活動できる期間は短い。また、国によってはストライキ（教員・生徒）があるので自分の予定どおりにはいかないことを想定しておくこと。時間に余裕をもって計画をたてるとイライラしない。

・言語に対する不安、現地語の教材など、具体的にどういうギャップ（文化的なズレ、要請と勤務内容のズレ）があり、どう克服するのか。事前情報をどのように参考にするのか。

要請内容が現状とずれているのは当たり前、と思うくらいでいい。発展途上国なので日本のようにはいかない。日本で仕事をしていた時と比較すると疲労が倍増する。何か与えてくれるのを待つのではなく、自分でできそうなことを見つけ、まずはやってみることが必要。なにか始めていく（見せていく）ことで周りの人々が認めてくれるようになる。

学校の先生はプライドを持って仕事をしている（昔の日本のように学校の先生は社会的に尊敬されていることが多い）ので、意見をすることは状況を考えて。言葉も未熟な若造が何を言う、という受け止め方をされるのは損である。まずは信頼関係を作る。挨拶は大事。押しつけるのではなく、お互いに認め合った後で意見をすることが、遠回りではあるが浸透する。任期が短いので焦るかもしれないが、急がば回れ、である。子どもたちへの接し方も、国によって異なる。（例：ニジェールは動物用の鞭で子どもを叩く。）日本を基準に考えると疲れるので、そのような物差しは捨てること。「こういうこともあるんだ。」

言葉については自分で努力する必要がある。また、現地の先生と仲良くなって助けてもらいながら活動できるといい（私は小学校の先生に家庭教師をしてもらっていた）。

公用語と現地語がある場合は、両方を求められる（特に小学校）。小さい子は現地語しか話せないことが多いので、努力が必要。また、現地語を教えたがる人が多いのでそういう機会を利用し、身につけていくと良い。

当然のことだが、いろいろな面で日本とは違う。教科書もそういう違いが端的に表れているので面白い。（例えば、ニジェールの地理の教科書には、交通機関としてラクダが載っている。）違って当たり前、という心構えで臨むこと。日本に戻ってから任国の話をする機会があるので、面白い、珍しい、と感じた物については記録をとっておくといい。慣れると当たり前になってしまうので、いざ日本で説明しようとするとなかなか難しい。記録は大切。

帰国隊員による任国事情は生の情報なので参考になるはず。メール等で現地にいる隊員と連絡がとれるならなお良い。ただし、場所によっては通信事情が良くないので、日本のようにすぐ返事が来ることを期待しないこと。また、重いデータを送ったり要望したりしないこと。そして、わざわざ言うまでもありませんが、礼儀を忘れないこと。（返事を頂いたら「届きました」くらいの連絡はしましょう。遠い場所で心配しているかもしれません。）

・日本の学校への還元の方法、日本と現地との連携方法

向こうに行っていると日本の多忙な生活を忘れてしまうので、「これくらいしてもらえないのでは…」と期待してしまうが、実際は難しい。担当者が決まっているのなら話は別。

私は月1回を目標に近況報告の手紙を送っていたが、それを学校便りに載せてくれていたようで、それだけでも嬉しかった。その後子ども向けに「ニジェール便り」を数回送ったが、それを読んでかどうか、生徒会が中心となって文房具を集め、ニジェールへ送ろう、という活動をしたそうだ。（しかし、6月現在もまだ届いていないらしい。）送料の問題もあるので、もし、何か送ってもらおうつもりがあれば、信頼できる人にお金を預けていくのも一案である。（急ぎで必要なとき、航空便はかなり高いので）

インターネットが使いやすい状況にある国であれば、それを使った交流もできるかもしれない。ただ、現地の子どもと日本の子どもが直接やりとりするのは無理ではないか。現地の子どもが、コンピューターを普通に使えるわけではない、ということを知るのも国際理解である。子どもたちにとっては、自分の身近な人がどこか遠い国で生活していることさえもあまりない経験なので、情報を送るだけでも十分に思う。

派遣後

・帰国後、現場でどう活かすのか

帰国後、元の学校に戻れる場合は、帰国後の活動もやりやすいように思う。（派遣中にお便り等を送っているとなお良い）

しかし、異動があると自己紹介から始めなくてはならず、億劫になる、というのが正直

な思いである。ただ、子どもたちは興味を持ってこちらの話を聞いてくれるので、話をする価値はある。保護者も興味をもってくれているようだ。

ただ、現場に復帰してしばらくはそんな余裕はない。日本の時間の流れについていくだけで精一杯である。さらに、教育課程についても前年度末に決まっているので、そこに新たなことを組み込むのは難しいだろう。集会時や授業等の機会をとらえて話す、というのが一番無理なくできそうである。(2年目から校務分掌において国際理解担当者にさせられそうな...)

帰国後の日本の生活に対してどのように準備するのか。

- ・ 国際理解教育プロジェクトを、帰国隊員・派遣中隊員の連携によって推進していく。
(集まった情報や培った経験を具体的につかっていく場所について)
- ・ 隊員バックアップシステムの紹介、そこにどういう立場で関われるのか。

私個人としては、このシステムについて関わる余裕がなく、傍観者となってしまっている。良い制度なので役に立ちたい、という思いはあるのだが。

参考 教育活動について

要請内容 (配属先 視学官事務所(日本の教育委員会のようなもの))

管轄の小学校において APP(生産実習活動 日本の技能教科にあたる)の授業を実施し、教員に対しても指導する。ニジェールの教育課程に APP が含まれているのだが、実際は教員も教え方を知らない(教科書もない)という状況であり、実施はされていない。

実際の活動 市内には公立小学校が約 30 校、私立小学校は約 10 校ある。特に教育委員会からは要請がなかったので、自分で学校を選定して巡回し、音楽(フランス語・現地語の歌)・体育・家庭科(裁縫)・図工(折り紙・切り紙・工作)を実施した。時間割についてはあってないようなものなので、自分で予定表を作り、校長には全体の予定、それぞれの担任にはメモを渡していた。また、配属先には月の予定表を渡していた。

現地の先生たちや子どもたちのためになる物を何か残したい、という思いから、資料を作り、公立小学校の先生たちに配布した。講習会をした上で配布するのが理想だとは思ったが、それはできなかった。また、教員養成校で学生を対象とした活動をしようと計画したのだが、ストライキのために計画倒れとなった。

課題 物がない、ということは工夫次第でなんとかできることなのだが、援助に慣れてしまっているがためにすぐに物を欲しがる(これは先進国が悪い)。子どもに対しての授業はできたが、教員に対しての活動は実行するのが難しい。日当(悪しき習慣である)の問題も大きい。

配属先の上司、各校長・教員それぞれの力量差が大きい。そこで教員対象に何ができるか。工夫が必要である。